敗戦を回顧しながら

長嶋安男
上鷺宮五丁目

昭和十六年四月、中学校へ進学した直後に書いた家庭環境調査票の進路希望欄に、「高等師範」と記載したことを、なぜか鮮明に記憶している。それが、なぜか昭和二〇年八月の敗戦の日には、神奈川県戸塚にあった海軍軍医学校の校庭で、ギラギラ照りつける炎天下、三〇分も前から直立不動の姿勢をとらされて、天皇の「玉音」放送を聞いていたのだった。

幸か不幸か――もちろん、当時、軍国少年であった私は感激の頂点にいたのだが――八月十五日は十七歳の誕生日であった。軍人として、己の誕生日に天皇陛下のお声を聞ける！　胸がいっぱいであった。

初めて聞いた天皇の声は、ラジオの調子の悪さも手伝ってか、ほとんど聞きとれず、意味不明であった。ただ一か所、「……新爆弾の発明により……」という箇所だけが耳に残った。この新爆弾が、広島・長崎に落とされた原子爆弾であることを知ったのは復員してからあとのこと。その時は、「日本に強力な爆弾が発明されたんだ！　これで劣勢も挽回できる」と思ったほどであった。正しい情報など何一つ知らされていなかった少年兵の認識は、この程度でしかなかったのである。

だから、もし敗戦が一か月も延び、米軍が九十九里浜にでも上陸してきていたら、私たちのような少年兵は「天皇陛下、バンザイ！」などと叫びながら、爆雷を背負って敵の戦車の下へ飛び込んで行っていたのではないか。事実、毎日がその訓練に明け暮れていたのだから……。真実を知らない、真実を知らされていないということは恐ろしいことである。

そう言えば、私より一年ほど早く、海軍の予科練へ志願していったYという小学校時代の同級生は、八月十四日に九州の基地から沖縄の戦場へ特攻機で飛び立ったまま、ついに帰還しなかった。戦後、Yの母親と出会うのは辛いことだった。こちらが先に気づいたときには、そっと横道に逸れて顔を合わせないようにした。Yの母親が先に気づいたときは、初めの頃こそ挨拶をしてくれたが、後には、下を向いたまま傍を通り過ぎて行かれるようになった。いまだに胸の痛む思い出である。

同じようなことは、いくつかある。

少年通信兵としてフィリピンへ行ったまま帰らなかったS。予科練から帰っては来たものの、荒れた毎日を過しているうちに肺を冒されてしまったU。大学生の頃、何も知らずに久し振りに訪ねたUの家では、仏間で母親に長時間泣かれてしまった。長押にかけられた額からは、悪戯っぽいUの笑顔が私を見下ろしていた。Kとは大学編入試験の時にたまたま出会った。ちょっとした男前のKは、勤労動員の工場では女子挺身隊員からちやほやされて、私のようなモテナイ連中からはやっかまれたものだった。彼が海軍を志願して入隊した日などは、タレント並みの壮行会だったのに、試験で出会ったときの彼は、すっかり憔悴していた。軍隊にいたころ、彼もまた肺を冒されたらしい。間もなく、死亡通知が届いた。

過日、中学時代の同期会があった。幹事の報告の中で、この二年間に八人の物故者があったことを知った。長寿社会といわれる時代に、六〇歳そこそこでこうも多くの仲間が死ぬものだろうか。名簿を渡される。物故者のうち、若い頃に死んだ学友達は、みな肺結核である。「今の時代なら……」と思う。検診で早期に発見されていただろう。特効薬もある。栄養も十分とれただろう。そして、一緒の席で談笑しただろうに……と思った。

私は昭和三年生まれだからでもあろうが、YやSを除けば、同級生で戦死者はそう多くない。ただ、肺結核での病死者は随分と多い。私も、昭和二九年に発病して三か年間休職、清瀬で療養の日々を送ったから言えるのだが、あの病気は十分な栄養をとっていればまずかからない。睡眠をしっかりとり、美味しいものを食べていれば、それで抵抗力ができてしまう。しかし、そんなことは、戦争中、どこの家庭でできただろうか。

世の中は星に碇に闇に顔　馬鹿者だけが行列にたつ

そんな毎日の中で、育ち盛りの年齢にあった中学生は、麩入りの水団のようなものすら腹一杯食べることはできなかったのである。いったん結核と分かれば、それは確実に「死」を意味した。

私より五歳から十歳上の人たちは、屍を異郷の山野に晒した。五歳から十歳下の人たちは、疎開生活の中で飢えに泣いた。戦争は、若者や子どもたちを健全には育てなかったように思う。みずからを顧みて人格形成の不十分さを思うとき、いつも、戦争の痕跡をそこに見出すのである。

太平洋戦争以後今日まで、日本は、新たな戦争に参加して来なかったか？　朝鮮戦争、ベトナム戦争に、日本は不参加であったといい切れるか？　また、それらの戦争とは性格は違うが、経済戦争、交通戦争、受験戦争等々に、子ども、若者を巻き込んできはしなかったか。戦後生まれの人々も、私たちとは違うけれども新しい戦争の被害者に見える。新しい戦争の生んだ暗い影を、時に彼らのなかに垣間見たりする。でも、それを非難

することなどできないと思う。なぜなら、彼らの人格形成に手を貸してしまったのは、自らの中で十分な戦争に対する反省をしてこなかった私たち、戦後の親たちであったのだから。